

ベガルタ仙台・市民後援会主催「サポートーズカンファレンス」議事録

公開日:2026年2月6日
作成:ベガルタ仙台・市民後援会

- 開催日時 2026年1月31日(土) 14:00~16:10
- 会場 ユアテックスタジアム仙台 インタビュールーム、リモート
- 参加者 サポーター、市民後援会スタッフ 計78人

司会（後援会）：

12月20日にサポカンを開催してから短期間で、しかも特別大会の直前、ちょうど1週間前というタイミングでの開催である。そのような中で、現地参加ならびにリモート参加いただき、ありがとうございます。

今日の議題は2つだけである。1つ目は、特別大会・百年構想リーグをどのように応援していくのかという点である。2つ目は、クラブ宛てにいただいている意見や要望についてである。すでにクラブからの回答はいただいているが、その回答を踏まえてどう考えるかという点も含めて、意見をいただきたいと考えている。

まず、1点目は百年構想リーグの応援について。

応援をどうしていきたいのかという点について、最初に3択の質問を行いたい。率直に言って、百年構想リーグに対する皆さんの応援のモチベーションがどうなのかを聞きたい。選択肢は3つである。

1つ目は、去年と同じように、例年どおりホームゲームには行く予定であるという人。2つ目は、少し減ると思っているという人。3つ目は、だいぶ減る、あるいはほぼ行かないという人である。まずはホームゲームについてである。リモートの皆さんも、手を挙げてほしい。

まず、A「去年と同じ」という人は挙手をお願いする。次に、B「少し減る」という人は手を挙げてほしい。次に、C「ほぼ行かない」「ほぼ行けない」という人は挙手をお願いする。集計結果を伝える。最初の選択肢Aが37人、次Bが14人、最後Cが1人という結果である。

比較的熱心に応援している皆さんでもこのような傾向であるということを確認しておきたい。今日ここに集まっている人たちは、あまり減らない傾向が強いとは思うが、それでも減る傾向は見えている。百年構想リーグのリーグ戦が、去年と同じような人数が入るかと言えば、おそらくそうではないだろうということが、少なくともここからは見えてくるのではないかと思っている。

特にリモート参加の皆さんには、遠方から参加している人も多く、なかなか現地に来づらい人たちも含まれているため、その点では半々の結果になっている。少し減っているという現状も踏まえ、そこはしっかりと見ていく必要があると感じている。

こうした状況を前提にしながら、ここから資料を少し見ていきたいと考えている。

資料は1ページ目から6ページ目まであり、最初の4ページがサポーター関連、最後の2ページがクラブ宛ての内容だったと理解している。

資料には「項目・分類・質問」と書いてあるが、分類については少しだまかではあるが、「継続」と書い

たものは、これまでと同じような強度で応援を続けてほしい、お願ひしたいという意見が強いものを指している。「意見」と書いてあるものは、12番から17番まで、「こうしたらどうだろうか」「どうなのだろうか」といった提案や疑問が含まれている内容である。

資料の中身について、1番から順にキーワードだけ簡単に拾っていく。

1番は、新入団の選手もいるので、応援は変えない方がよいという意見である。

2番も同様で、シンパシーを感じている選手がいるので、引き続き先導をお願いしたいという内容である。

3番は、チャントを紙で配布する、あるいはPDFファイルで配布するなどして、応援の共通理解を保つてほしいという意見である。

4番は、通常のリーグ戦と同様の体制、応援スタイルを継続してほしいという要望である。

5番は、クラブの魅力の一つは応援なので、そこを大切にしてほしいという内容である。

6番は、ホーム、アウエイともに全力応援で行きたいので、その体制を整えてほしいという要望である。

7番は少し長いが、通常シーズンと変わらない応援をしたい、してほしいという内容である。途中に配置についても現状のままでよいという記述があり、観客数が減少しても、いろいろ工夫してくれるだろうから、とにかくライト層のためにも応援は続けてほしい、スタジアムの魅力が半減しないようにしてほしい、という趣旨である。

8番は、応援のやり方が通常と違う形になるとしても、例えば手拍子を使うなどして、応援の強度を上げる工夫ができないかという意見である。

9番は、応援リードを続けてほしいという要望である。また、キックオフ前の応援を少し短めにして、セレモニーの音声が聞こえるようにしてはどうかという意見もあった。

10番は、リーグ戦同様のコールの継続を求める内容である。

11番も同様で、感謝に近い表現ではあるが、応援の継続を求める意見である。

12番は、通常のリーグ戦と同じ枠組みまでは行わず、応援は選手コール中心でどうか、という提案である。

13番は、選手ファーストの応援にしていきたいという意見で、少し抽象的ではあるが、そのように受け取ってほしいという内容である。

14番は、中心部の位置を変えるとしたらどこがよいのか、という質問に近い意見である。

15番は、百年構想リーグと通常のレギュラーシーズンのリーグにおいて、サポーターや中心部の応援の在り方を統一できないか、という内容である。ここについては、もし補足があれば、質問した方に後ほど発言してもらいたい。

16番は、L字型の応援導線を取り入れたいという趣旨である。

17番は、中心部の人たちが特別リーグでの応援に消極的に見えるが、何か理由があるのか、という質問である。

全体として、百年構想リーグの応援について、皆さん自身がモチベーションや雰囲気がいつもと少し違うと感じた上で、こうした質問や意見が出てきているのだと思っている。

こうした意見を踏まえたうえで、中心部の皆さんから、こうした意見について何か総括的な感想があれば聞かせてもらえないだろうか。

応援の中心部：

予想通りの話が出ている感じだ。

司会：

こうした要望を見ると、やはり一番強いのは、これまでのリーグ戦と同じような強度で応援をしてほしい、という点である。ただ、前回の12月20日のサポートーズカンファレンスでは、応援の場所を変えることも検討してみようか、という話があったと記憶している。その点についてはどうだろうか。

今回については、人数の入りが確実に減りそうだという感覚がある。これはあくまで私自身の見立てではあるが、そのような状況の中で、空席が目立つ可能性もある。そうした場合に、応援の場所を変えるといった考えは、今も変わらずにあるのだろうか。

応援の中心部：

まず、その話題については申し訳ないが、少し置いておく。中心部界隈で「応援をやらなくてもいいのではないか」という話になった経緯について、背景を聞かないと理由が分からまま終わってしまうと思うので、どういう流れでそういう話になったのかを、改めて整理して説明したい。

司会：

説明をお願いする。

応援の中心部：

質問にも出ていたと思うが、「リーグ戦と同じテンションで応援をやりたい」という意見は確かに出てきている。しかし、正直に言うと、我々はそこに疑問を持っている。本当にそれができるのか、という点である。昇格も降格もない。いつもとは違うリーグ戦であり、J3のチームが混ざっていたり、僻地に遠征させられたりもする。しかも、半年間で、優勝賞金は1,500万円である。こうした条件を考えると、明らかに通常のリーグ戦とは、あらゆる点で違っている。

そうなったときに、言い方は大げさかもしれないが、本気で喜び、本気で怒り、試合一つ一つに対して、我々が本当に向き合えるのか、という話になる。ただ、「応援したね、楽しかったね」という感覚であれば、もちろんできる人もいると思う。うまく流しながら、そつなくやるということは可能だろう。しかし、そこに「本気でやる」という意味合いが入ってくると話は変わってくる。

例えば、去年の終盤戦で行ったことや、要所要所で夜なべの旗を入れたりといった、年間を通してリーグ戦と同じテンションを、百年構想リーグで維持し続けられるのか、という点である。それを全員ができるのか。通常のリーグ戦であれば、昇格も降格もあり、結果に対して非常にシビアでいなければならぬ。そういう前提がある。

しかし、何もかかっていない状況で、そのテンションを全員が維持するのは、正直厳しいのではないか、というのが我々の考え方である。これがまず一つ目である。

では、我々は何のために応援をしているのか。新規の客を楽しませるためでもなければ、見世物の一つでもない。少し格好よく言えば、チームを勝たせたくてやっている。その先に昇格という結果があるからこそ、やっているのである。そもそも今回の百年構想リーグは、そこから少しずれた位置にある。そういう

意味で、この大会に対しては、我々のスタンスも変わってくる。

我々としては、応援をやるなら 100%でやる。やらないなら 0 である。中途半端に 50%でやるという選択肢はない。本気でやるか、本気でやらないかであり、「本気でやらない」というのは、ゼロにするという意味である。

分かりやすい例で言うと、天皇杯の初戦などは、リーグ戦とは熱量が少し違う。しかし、天皇杯は勝ち進まなければいけない大会であり、最終的には決勝に行って優勝したいという目標がある。その段階を踏むために応援をしている。結果があるからである。

百年構想リーグになると、その前提が変わってくる。そこが大きな違いである。そうした前提を踏まえたうえで、「無理して応援する必要はないのではないか」という考えに行き着いている。

あまり縁起の悪い話はしたくないが、仮に開幕から 3 連敗したとする。そのとき、本気で怒って、選手にブーイングをするのか。このハーフシーズンの中で、それを本当にやるのか想像すると、おそらく多くの人はやらないのではないか、というのが我々の感覚である。

こうした中途半端な状態になるのであれば、半年間はしっかりサッカーを観る、というスタンスの方がよいのではないか、という話から、この議論はスタートしている。

今、私は話しているが、応援をしたい、したくないという立場を主張したいわけではない。進行上、あえて「やらない側」のスタンスに立って、今の考え方を説明している。ここが大前提である。

司会：

昇降格のないリーグ戦でどんなモチベーションが持てるのか、という基本的な話だったと思う。

いま話してもらった内容について、質問や意見があれば出してもらいたい。例えば、去年と同じくらいの応援は少し難しいのではないか、と感じている人たちが何人かいるわけだが、その人たちほどのような理由なのだろうか。物理的な理由、例えば転勤でいなくなるといった事情は別とする。

純粋に「なんだよね」と共感している意見なのか、それとも別の理由があるのか、もし同じような考えを持っている人がいれば教えてほしい。どうだろうか。手を挙げてもらえば、マイクを回す。先ほどの三択で言えば、2 番、3 番を選んだ人が 7 人、4 人と合計 11 人いるが、その 11 人の中の人で、意見がある人はいないだろうか。

サポーター：

昨年は、比較的多くの試合に足を運ばせていただいた。しかし、正直なところ、気持ちがそこまで高まらないというか、たぎるものがあまり感じられないという思いがあった。応援というのは、勝たせるため、勝つために行っているという意識が非常に強い。その中で、結果を出したとしても、何も得るものがないとは言わぬが、優勝賞金が 1,500 万円といった点だけを考えると、サポーターとしてのモチベーションはどうしても下がってしまう部分がある。

そのため、自分自身としては、観戦の頻度はどうしても下がってしまうのではないかと感じている。

サポーター：

さまざまな条件が重なって、モチベーションが下がっている部分はあると思うが、そもそもこの百年構想、J2・J3 の百年構想リーグにおいて、仮にエリアごとで 1 位になったとしても、賞金以外に何が得ら

れるのかという点で疑問がある。例えば、ルヴァンカップや天皇杯のシード権が得られるわけでもない。そうしたものがないからこそ、モチベーションが少し下がってしまっている部分もある。バスケットボールのBリーグも、新しい構造にするために、プレミアチャレンジ制度のような形で賞金額をなくしている。しかし、何が違うかと言うと、昇格の条件である。観客動員数や平均入場者数、加えてもう1つ条件があったと思うが、それらをクリアすれば、成績に関係なく上がる仕組みになっている。

入場者数によって1部、2部、3部が決まるという仕組みになっている点が、JリーグとBリーグの大きな違いなのではないかと感じた。

JリーグとBリーグ、両方の試合を見たうえでの率直な感想として述べさせてもらった。

サポーター：

Bリーグでは、2年ほど前に降格という概念がなくなり、新規参入を集め形になった。ここ2~3年は、いわゆる賞金や昇格を目指す明確な目標がない状態で戦っているリーグ構造になっている。最終的にプレオフに進めるのは26チーム中8チームであり、残るのはその一部である。それ以外のチームについては、正直なところ、戦力的に厳しい状況が続くケースも多い。

例えば、昨年の仙台89ERSもそうだったが、開幕から消化試合のような雰囲気になり、ほぼ毎試合大差で敗れる状況が続いていた。昇格や降格がない中で、何をモチベーションに試合を見ているのか、という話にもなってくる。

こうした経験から考えると、昇格や明確な目標がないレギュレーションであれば、その前提に合った戦い方や盛り上げ方をしてほしいという思いがある。例えば、ホームゲームは全勝するつもりで臨む、といった分かりやすい目標や熱量があればよいのではないかと感じている。この半年間は、こうした視点で試合を見てきた、という意見である。

応援の中心部：

Bリーグの話についてはバスケットボールを見ていないので、今の話を聞いてもあまりピンとこない。先ほどBリーグについて話していた方々の意見は、どちらかというとJリーグやクラブに伝えるべき話なのではないかと思っている。

結局、私たちは応援に行き、サポーターとして声を出し、アウェイにも足を運び、どこまで行っても現場に行っている人間たちである。そう考えたときに、百年構想のもとでシーズンが開幕し、応援している状況を自分自身に当てはめて想像してみてほしい。大事な場面で「仙台レッツゴー」を入れる場面や、後半開始直後の一発目のコールなど、実際の試合展開の中に自分を置いたときに、去年のように目を血走らせて本気で応援している姿を想像できるのかどうか、そこが一番重要だと思っている。

それができるのであれば、別に今の形で応援を続けること自体は、私は全然問題ないと思う。ただ、去年や一昨年と比べて、やはり熱量は下がるというのであれば、そんな中途半端なことはやめてしまった方がいいとしか思わない。ストイックな言い方になるが、応援とは本来そういうものだと思っている。

中途半端に、だらっと応援して、勝っても負けてもあまり喜びも悔しさもなく、とりあえず試合をしているから何かする、というような状態になるのであれば、そんな応援はやめてしまった方がいいと思う。だからこそ、実際の現場に当てはめて、自分がどう応援しているかを想像してみてほしい。

質問事項の中で「去年と同じ熱量を持って応援してほしい」「応援を先導してほしい」という意見が出ること自体は、私もよく分かるし、その通りだとも思う。しかし、それを実際にやったときに、本当に去年と同じ状態を作れるのかどうかという点は、やはり考える必要がある。

結局のところ、それはみんな次第という部分がある。だから、その点について、もう少しみんなの意見を聞きたいと思っている。

サポーター（リモート）

まさに、今発言された方の意見には強く共感している。昇降格がない特別大会において、通常のリーグ戦と同じモチベーションで応援をすることは、正直なところ無理だと思っている。ただし、その特別大会の意義や意味、目的や目標といったビジョンが、クラブ側からきちんと示されていないことが、率直な感想である。

クラブとサポーターが一丸となって特別大会を取りに行き、その流れで2026／27シーズンに勢いをつなげていくために、全力で応援してほしい、といった明確なビジョンがあれば話は違ってくる。しかし、そうしたビジョンが全く見えないからこそ、今のような状況に陥っているのだと思っている。

ここで少し確認したいのだが、今この場にクラブの方がいるのかどうかが分からぬ。いらっしゃるのだろうか。

司会：

クラブからの参加はない。

サポーター：

失礼した。ただ、我々サポーターがこのように混沌とした状況に置かれていることに対して、クラブ側から何らかの意見や、我々のモチベーションを上げるためにコメントのようなものがあってもよいのではないかと感じている。そうした発信が少しでもあれば、状況は違ってくるのではないかという期待がある。

その点について、市民後援会や応援の中心部と、クラブ側との間に何らかのつながりがあるのかどうか、そのあたりが少し気になっていた。まとまりのない話で申し訳ない。

司会：

クラブの回答を確認する。百年構想リーグは、目の前の勝利を追い求めると同時に、チームの成長と進化を加速させる重要な試合である、という内容である。より具体的な内容については、今後、各メディアを通じてクラブ自らが発信していくので注目してほしい、ということだ。

正直に言って、この回答は回答になっていないという指摘については、私もそう感じるだろうと思っている。ここでクラブとして「こう考えている」という姿勢、たとえば、1位を本気で取りに行きたい、賞金は強化費に回したい、それだけでなく、J2とJ3が一緒になっているリーグの中で、プライドとして簡単にやられるわけにはいかない、さらに東北リーグのような構図になっているのだから、どこが相手でも勝つ、全勝しかない、というような強いメッセージがあれば、状況はだいぶ違ってくるのだろうと思う。だからこそ、私はクラブにはこのサポーターカンファレンスに出てきてほしいと、これまで言い続けてい

る。こうしたトーンを、ぜひ肌で感じてもらいたいからである。後半の話になるので、ここで結論のようなことはあまり言いたくないが、結局、仮に1万7千人、1万8千人が入っていると言っても、その全員が同じ応援強度で応援しているわけではない。応援を作っていく中心となっている人たちが確実に存在しており、ここにもその中心と言える人たちが何人かいる。そうした人たちの声や意見を直接聞き、言葉のキャッチボールをする中で、クラブが得られるものは大きいはずである。

しかし、それがなかなか理解してもらえないのが現状であり、残念ではあるが、それ以上は言わない。なお、先ほどBリーグの話をしてくれた方の意図は、おそらく、Bリーグが制度設計の段階で昇降格をなくすことを明確にした結果、モチベーションのあり方が大きく変わってきてているという点を踏まえ、百年構想リーグも同じような構造的な問題に陥っていないか、という指摘をしたかったのだろうと受け止めている。

それから、もう一つ聞きたいことがある。先ほど挙手をお願いした理由は、去年と変わらずスタジアムに行くと答えた37人の方々が、どのような気持ちで行こうとしているのかを知りたいからである。どのレベル感で臨むつもりなのか、という点だ。

先ほど応援の中心部からも発言があったが、例えば、今回は席に座って試合をしっかり見ようと思っている、普段は熱量高く応援しているが、今回は試合内容を重視しようとしている、あるいは若手の成長や推している選手を重点的に見ようとしているのか、さまざまなスタンスがあるのだと思う。

しかし一方で、事前の意見・要望としては、去年と同じような応援をしてほしい、応援を先導してほしい、という声が多いのも事実である。ここには意見の違いが確実に存在していると思う。だからこそ、意見が違う人には、ぜひ声を出して教えてほしい。片方だけの偏った話にならないようにしたいと考えている。もし「自分は違う」という考えを持っている方がいれば、勇気を出して挙手してほしい。もしくは、休憩時間に質問用紙を使って意見を書いて入れてもらって構わない。ぜひメモをして提出してほしい。以上、よろしくお願ひする。

サポーター：

私は、森山監督がベガルタ仙台の監督に就任してから、秋田から通うようになった人間である。今年は初めて年間チケットを購入し、もっと応援したいという気持ちは持っている。

ただ、先ほど皆さんが述べていた通り、私自身もこの半年間の特別リーグについて、応援に行ける限りはユアテックスタジアム、あるいはアウェイにも行くつもりではあるものの、昨年や一昨年、特にプレオフのときのような心境、テンションで応援ができるかと言われると、正直そこまでの状態にはならないというのが、シーズン終了後からずっと感じていたところである。

そのため、司会が先ほど述べたように、応援はもちろんするが、当時と同じ熱量まで上がるかと言えば、そこまでではないというのが率直な思いである。ただし、これは決して応援しないという意味ではない。むしろ、こうした機会だからこそ、冷静に試合を見る中で、新たな発見があったり、この選手は良い、この相手選手は上手いといった気づきを得られる場面も多くなるのではないかと思っている。

チャントを歌うこと自体は楽しいが、チャントを歌うことだけが応援ではないと考えている。スタジアムに足を運び、チケットを購入し、クラブの売り上げに貢献することも、応援の一つの形である。その意味で、中心部の方々が全力で応援するのはどうか、あるいは一旦距離を置くのはどうか、という意見につい

ても、概ね賛同できる部分がある。

仮にそうした方向性になるのであれば、私は中心部の方々の意見を尊重し、この百年構想リーグについては、そのスタンスで応援に臨みたいと考えている

司会：

ありがとうございました。今まで出てきた意見は、「そこまでテンションを上げられない」という話が中心だったが、そうではなく、「自分は去年と同じテンションで行く。やるからには全力でやる。この百年構想リーグの試合もすべて行く」というスタンスの人はいるだろうか。ここまで言われると、なかなか言いにくいかもしれないが、どうだろうか。

サポーター：

サポ自バッ克である。私は「全力で応援する」に丸を付けさせてもらった。理由は非常に単純で、応援が楽しいからである。全力で応援しないと楽しくない。

また、私自身も年齢を重ねてきたが、若い選手たちが全力で汗をかき、いろいろなことをいとわず、チームとして必死に頑張っている今の森山仙台が大好きである。だからこそ、全力で応援したいと思っている。

正直、このハーフシーズンは何なのだろうと最初は思っていた。しかし、その後の入団発表や記者会見、この間の横浜 FCとの練習試合、そして監督のコメントなどを見ていく中で、これは 0.5 シーズンと 1 シーズンに分かれているのではなく、1.5 シーズンなのではないかと考えるようになった。

この 0.5 シーズンで、どういう選手が出てくるのか。ブラジル人 FW のスター選手が来たわけでもないが、新たに加入した選手たちには頑張ってもらわなければならない。その選手たちも、素人目ではあるが、可能性を感じる選手が多く入ってきたと思っている。そうした選手たちには、この 0.5 シーズンを経て、J1 を取りに行くときの主力になってもらわなければならないと考えている。

そういう意味では、ここでテンションを下げるわけにはいかないというのが、私の正直な気持ちである。結局のところ、好きで、好きで応援したいだけなのだが、見方としては、このシーズンは 1.5 シーズンだと思っている。

主力選手の多くは、おそらく 26/27 シーズンまでの契約を結んでいるはずであり、途中での補強もあるだろう。このシーズンでどういう結果を出すのか。賞金の 1500 万円はさておき、森山監督がどのようなサッカーをしているのか。その積み重ねによって、獲得する選手の可能性も出てくるのではないかと考えている。

そう考えると、大きな宿題を抱えながら試合を見て、考えながら応援していくという意味で、このシーズンは決して悪いシーズンではないのかもしれない、オフシーズンを見て感じるようになった。

非常に個人的でわがままなお願いではあるが、100%の応援ができるよう、しっかりとリードがあると、私はありがたいと思っている。

サポーター：

私も、相変わらず毎回変わらず行くということで手を挙げさせていただいた。先ほどお話をあったように、「ゼロか 100 で応援する」という考え方であれば、自分は 100 で応援できる側だと考えている。

ただし、応援の中心部の方がおっしゃっていたように、負けが続いたときに、どのように選手に声をかけるべきかという点については悩みがある。リーグ戦であれば、選手の顔色を見ながら、「まだ終わっていない」「前を向こう」といった、先を見据えた前向きな声かけができていた。

しかし今回は百年構想リーグであり、賞金が1,500万円かかっているという状況である。昇降格なしという前提の中で、チームの状態がマイナスに傾いた際、声かけの温度差が生じてしまうのではないかという不安を、以前から自己の中で抱えている。それでも、試合は試合であり、本気で勝ちたいという思いは変わらない。そのため、企画としても応援にはしっかりと参加したいと考えている。

サポーター：

私も基本的なスタンスは昨年と変わらず、「行く」という姿勢である。

もちろん、昇降格がないため、そこに懸けるものや燃え上がる要素の一部が失われる事実である。しかし、だからといって、チームのスタンスとしてさまざまな試みが行われるとしても、その先の2026年、2027年を見据えたとき、ほぼ同じカテゴリーにいるチームや、いわゆるベジタル形成のチームに負けたくないという思いが非常に強い。

負けてよい試合だとは考えていない。だからこそ、そこは全力で応援すべきだと考えている。

司会：

はい、ありがとうございます。他にご意見はいかがだろうか。

人それぞれさまざまな考えがあるということだと思う。ただ、全体で見れば、「気持ちを作っていくのがやや難しい」という点については、皆さん共通の理解であると感じている。

後援会として、百年構想リーグをどのように捉えているかは人それぞれだと思うが、ラジオ番組などでも話題にしている中で、「勝ち癖をつけるリーグ戦になればよい」という意見が出ている。これはライター板垣さんの言葉である。また、「1.5年のリーグ」と捉え、本番となる2026/27シーズンに向けて、テンションや戦術を高め、チームを強くしていくための0.5年として取り組んでほしい、という意見もあった。このあたりは、比較的多くの方から聞こえてくる意見である。

ここで、もう一度挙手をお願いしたい。先ほどはホームゲームについて聞いたが、より顕著に現れるのはアウェー戦ではないかと考えている。

A「アウェー戦に、昨年と同じように行く」という方は、リモートの方も含めて手を挙げてほしい。

(挙手確認)

21名である。

次に、B「昨年よりは行く回数が少し減るだろう」という方、手を挙げてほしい。

(挙手確認)

最後に、C「行かない」という方、手を挙げてほしい。

(挙手確認)

アウェー戦について整理すると、昨年と同じように行くという方は、先ほどより3~4人減っている。一方で、「回数が減る」という方は19人で、5人増えている。「行かない」という方は5人、ほぼ変化はなく、1人増えた程度である。

大きな変化ではないものの、やはりアウェー戦になると差が出てくるという印象である。想定していた通り、アウェー戦での盛り上がりを作っていくのは、やや難しくなりそうだという感触を持っている。ただし、ここで議論を深めるつもりはない。本日は、数字を押さえ、感覚を共有することを目的としている。ここまでで、予告していたとおり、休憩を挟みたい。当初は40分に1回程度としていたが、事情により打ち合わせが必要になったため、ここで20分間の休憩とする。長くなってしまい申し訳ない。

(休憩)

司会：

それでは再開する。

休憩中に、応援の中心部から若干の説明があり、この場で現地参加者向けに話が行われた。内容がまだ固まっていない話で、一人歩きすると困る内容だったと思うので、ここでの共有は割愛する。ただし、後日あらためて、中心部から何らかの形で情報提供を行う予定であるとの説明があったため、詳細についてはそちらを待っていただきたい。

休憩前は、「アウェー戦への参加が少し減るのではないか」という話題の途中であった。正直なところ、応援の中心部としても、テンションを作ることが難しいというところから話が始まり、その背景についても丁寧な説明がなされた。それを受けて、参加者の中でも「なるほど」と受け止める空気はあったと思う。ただし、応援の仕方は立場や環境によってそれぞれであり、昨年と同じように100%の形で応援したいという人もいれば、そうでない人もいるのが実情である。

先ほど、アウェー戦は特に応援を作るのが難しくなるのではないかという話をしたが、逆にアウェー戦だからこそ、何か実験的な取り組みをしてみる、あるいは新しい、面白いことに挑戦してみる、といった発想はないだろうか。応援の中心部として、そのような話が今年出たことはあるのか。

特に百年構想リーグという位置づけであれば、ホームではなくアウェーの場で、昨年とは違う形の応援を試してみる、といった考え方もあり得るのでないかと思うが、そのあたりについてはいかがだろうか。

応援の中心部：

現時点では、そのような具体的な話はまだ出ていない、という状況である。そこまでの段階に話がいっていない。

司会：

了解した。

アウェー戦まで残り1週間という状況であるが、正直なところ、感触としてはやはり難しさを感じている。百年構想リーグという大会の性質を踏まえると、簡単ではないというのは理解できる。

これは私個人の考え方かもしれないが、応援する・しないという以前に、そもそも「サッカーの試合を見たいのか、見たくないのか」という点が重要だと思っている。この考え方方は昔から言われてきたことであり、Jリーグ発足前、JSLの時代にもよく耳にした。

当時は観客が200人、300人程度しか入らない試合も珍しくなかった。仙台に限らず、どこのクラブも同

様であった。その理由としては、「レベルが低い」「本気でやっていないう見える」といった声が多かった。その後、Jリーグが始まり、なぜ観客が増えたのかといえば、やはりプレーのレベルが上がり、レベルの高い試合を見たいという欲求が満たされるようになったからである。

例えば、当時のトヨタカップ（現在で言えばクラブワールドカップに近い大会）では、国立競技場が満員になった。トップレベルの試合が見られるからである。また、高校サッカーの決勝戦が満員になるのも、選手たちのひたむきさが伝わったからだと思う。

結局のところ、「レベルの高い試合や、ひたむきさが感じられる試合」には、人は集まる。だからこそ、百年構想リーグにおいても、クラブやチームに対して求めたいのはその点である。

若手育成を理由に、試合のレベルを下げていると受け取られるのはまずい。勝ちにこだわる姿勢を持続すること、そしてひたむきにプレーすることが重要である。試合を途中で投げるようなことはないと思うが、下を向いてプレーする姿勢が見られれば、観客は確実に減る。

「レベルの高さ」と「ひたむきさ」、この2つが大事だと考えている。そこが分岐点であるということを、クラブにしっかり伝えたいと考えているが、皆さんには賛同していただけるだろうか。

（ほぼ賛同の反応）

ありがとうございます。それでは、この点についてはクラブ側にしっかり伝えたい。

司会：

市民後援会は毎月クラブとの定例会があり、部長クラスとの話し合いの場を持っている。その場で、今日の議論の雰囲気や、参加者の感触、人数の話も含めて伝えたいと考えている。観客数が減る可能性について、危機感を持つべきだという点は、伝えるつもりである。

ここまでさまざまな意見が出たが、「自分の意見がまだ十分に取り上げられていない」「もう一度確認したい」という人はいないだろうか。

先ほどは、意見や質問を書いてもらう時間を取りなかったが、今からでも可能である。会場の方は挙手で、リモート参加者は質問箱に入力してほしい。質問箱は誰が書いたか分からない形になっており、事務局で確認できるようになっている。

質問は一つずつ確認するが、内容が似ているものはまとめて扱う場合がある。特に伝えておきたい点や、中心部として考えを整理しておきたいテーマがあれば、この場で挙げてほしい。

例えば、応援の強度そのものの話は一旦置くとして、旗の本数に関する意見や、先ほど挙がっていた12番から16番付近の話題がある。また、冒頭でも触れたL字エリアでの応援について、「もっと熱量を上げる工夫ができないか」という意見は以前から出ている。

さらに、「選手ファーストの応援にしたい」という意見についても、これは選手へのブーイングの扱いなどに関わる話だと認識している。その点についての考え方や意見も、この機会に聞いておきたい。

応援の中心部：

挙がっている質問の中から順に回答する。

まず、質問16のL字応援についてである。正直に言えば、現状ではL字に力を割けるほどの人数がいない。そもそもL字エリア自体が満員になっておらず、どうしても空きが目立ってしまう。そのため、現

段階で本格的に取り組むのは時期尚早ではないかと考えている。

仮に、ホームゲームで通常どおりの応援を行うという前提があるのであれば、「この試合だけ L 字でやってみる」といった実験的な対応はあり得るかもしれない。ただし、現状で考えられるのはその程度である。

次に、質問 15 の「中心部とサポーターの応援方法の統一化」についてである。正直なところ、何を指しているのか分かりづらい質問であると感じている。

また、「中心部の位置を変えるとしたらどこになるのか」という点についてだが、特定の場所を固定して想定しているわけではない。先ほどの L 字の話ともつながるが、「今回は L 字が弱いから次の試合は L 字でやってみよう」とか、「今日は人数が少ないので中段から上に人を集めよう」といったように、その場の状況や流れで判断することになると思う。

ただし、本来の中心部の位置は現状の場所であり、その点は変わらない。

次に、「選手ファーストの応援にしたい」という意見についてである。質問の意図が司会が言及したように、ブーイングの是非という話であれば、一概に否定されるものではないと考えている。ブーイングを嫌がらない選手も実際に存在するし、「ダメな時はブーイングしてくれ」と考える選手もいる。仙台にもそういう選手はいる。

もちろん、ブーイングを嫌う選手もいるだろう。この点については、受け取り方や考え方によって意見が分かれる部分であり、一律に語れるものではない。

次に、質問 12 の百年構想リーグについてである。これは比較的現実的な指摘だと感じている。応援の形としては、選手コール中心になる可能性は十分にある。

スターティングメンバーが固定されない可能性もある。言い方は適切ではないかもしれないが、いわゆる「1.5 軍」のような編成でシーズンを回し、若手を積極的に起用していく展開も考えられる。その場合、チーム全体への一体的な応援を強めるよりも、個々の選手にフォーカスし、選手コールを多めに行うという形は現実的な選択肢だと感じている。

質問 11 については、先ほどの話と重なるため、ここでは割愛する。

次に、質問 19 についてである。「クラブの社員の話を聞くと、あまり良く思われていないのではないかと心配だ」という点だが、正直に言えば、良く思われていないだろうと思う。そもそも、サポーターはクラブに良く思われるため応援しているわけではない。

「クラブとサポーターがうまく噛み合っていないから結果が出ないのではないか」という意見については、個人的にはその通りだと思っている。他の人がどう感じているかは分からないが、長く見てきた中で、クラブとサポーターがしっかり噛み合っている時期は、結果も出やすい。逆に、噛み合っていない時期は、何をやってもうまくいかないことが多い。

クラブという組織は、どこも簡単には変わらないものである。だからこそ、うまく噛み合った時には結果が出るし、そうでない時は苦しくなる。長く関わってきた実感として、そういうものだと感じている。

司会：

この質問をサポーター側に振った理由について説明する。おそらく、この件に対する公式な回答は、すでにクラブ側の回答に示されているとおりであり、個人の処分や対応に関する事項については「回答しない」という姿勢が明確に示されている。その回答は資料の後半にも同様に記載されている。

つまり、クラブ側としてはこれ以上の回答はしないだろうと判断した。そのため、回答できる可能性があるとすれば、サポーター側しかないのでないかと考え、この質問をサポーター向けに入れた次第である。質問文の中にも「皆さんからも回答してほしい」という趣旨が書かれていたため、サポーター側の質問として扱った。

質問内容は、2023年6月の磐田戦を起点とする出来事に関するものであり、そこからすでに2年半近い時間が経過している。その間の経緯について、今この場で問われているという状況である。

具体的な質問としては、処分はすでに解除されているのかどうか、解除されていないのであれば定期的な面談は行われているのか、また、同様のケースで処分が解除された事例はあるのか、解除されているのであれば、なぜ公表されていないのか、という点である。

これらはいずれも、クラブ側からは回答しないとされている事項である。そのため、サポーター側として把握している事実や、言えることがあれば、ここで回答してもらえればと思う。

応援の中心部：

承知した。

1から14まで全部話せと言わなければ話すが、まず気になっている点がある。最近になって急に「機密事項」という言葉が使われるようになったが、基準が非常に曖昧になっていると感じている。その「機密事項」とされている内容が、第三者には相当話されているはずだという話を、外からも内側からもよく聞く。関係のない人間が推測したり、いろいろな情報が出回ったりしている現状を見ると、「機密事項」という言葉だけが独り歩きしているように思える。正直なところ、最近その言葉を覚えたのかな、という印象すら持っている。

シンプルに質問に答えていく。まず、解除されていない人はいるのかという点については、いる。というより、全員解除されていないだろうという認識である。岡山のように定期的な面談をしているのかという点についても、おそらくしていない。実際に面談しているかどうかは分からない。解除している人がいるのかと言われれば、解除していないという理解である。これが質問20に関する回答であり、質問21も内容としてはほぼ同じである。

次に、「ここは違うと反論したい点を具体的に教えてほしい」という質問についてだが、正直なところ、反論したい点は非常に多い。ただし、これを語ろうとすると個人名が大量に出てくる。社員や関係者の名前も具体的に出てしまうため、公の場では話せないというのが実情である。

「現状を開拓するために考えられることは何か」「中心部としてクラブに求めていることは何か」という質問については、端的に言えば「ちゃんと話をしてほしい」という一点に尽きる。去年もそうだったが、大きな演出を行う際にはカンパを募ることが多く、今後もそうした場面は出てくると思う。スタジアムのサポーターに協力を願うことは、カンパだけでなく、席を出すときのように、他の座席の、正直言って顔も分からない人たちに対して「協力してください」とお願いする場面もある。そのような時に協力をもらえるとありがたい。

次に、旗の本数制限についてである。無制限になる予定はあるのかという質問だが、これは現在もクラブ側と話し合っている最中であり、結論は出ていない。ただ、個人的には可能性はあるのではないかと見ていている。歯切れの悪い言い方になってしまふが、現実として、応援が強いスタジアムを目指すのか、クレームの来ないスタジアムを目指すのかという、両極端な選択肢の間で揺れている問題だと思っている。

現在はホーム側に旗の本数制限を設けているため、ビジター側、具体的にはビジター自由席にも同じ制限が自動的にかかっている。しかし、このクラブはJ1昇格を目指しているわけで、J1に上がれば、応援の強度が高いスタジアムになるのは当たり前である。そのタイミングで急にルールを撤廃したり変更したりしても、J1レベルのビジターチームは、正直なところ守ってくれないだろう。くだらないルールだと言われ、あの手この手で応援をしてくるはずである。実際、我々自身もアウェイではそう考える。

そう考えると、現状のルールはあまり意味を持たなくなる。J1に上がったときのことを見据え、すべてのバランスを考えた、より現場感のある運用にしなければ、いずれ行き詰まるという話は常々している。ただ、正直なところ、クラブ側にはあまりやる気が感じられないという印象を持っている。

「パイフラ」についての質問もあったが、そもそも何をパイフラと定義しているのかを、もっと具体的に言ってほしいと思っている。とりあえずやってみればいいではないかというのが率直な考え方である。実際、去年も夜なべで作った旗を使って実施してきた。パイフラについては本数制限がないため、この質問者は、アルミポールを使う、いわゆるヘブンなどが使用している旗と、パイフラの扱いを混同している可能性がある。パイフラは扱いが別であり、制限はかかっていない。

「中心部から離れると歌詞が聞き取りにくいので、歌詞を印刷したものを後援会カウンターに置いてほしい」という意見についてだが、歌詞カードは現在も用意している。サポ自バッックが中心となって管理しているため、サポ自バッックに取りに来てほしい。他席種については、元々はクラブから歌詞カードを全ゲートに設置したい旨サポータ有志への相談があり、我々も協力して設置していた。今もクラブは歌詞カードボックスと看板は持っているはずだ。

最後に、「中心部に対して後援会や一般サポーターからの要望はあるか」という質問については、先ほど述べた内容と重複するため、ここでは割愛する。

司会：

リモート参加の方から、質問・意見が寄せられている。意見のみのものもあるが、紹介する。

昇降格がないためテンションが下がるのは、やむを得ない面があると思われる。しかし、応援風景もベガルタの良さの一つであり、それを見て楽しいと感じ、スタジアムに足を運ぶ人がいるのも事実である。チームをサポートするという意味でも、形は変わるかもしれないが、応援は行った方がよいと考えるし、その姿を見たい、という意見である。

また、優勝賞金は1,500万円だが、1試合あたり50万円の勝利給もある。チームの経営状況を好転させるため、そして8月以降のリーグ戦再開を良い状況で迎えるためにも、百年構想リーグにおいて多くの勝ち点を目指す必要がある、という意見である。

このほか、短い質問が3点ある。そのうち1つを紹介する。

「0／100の応援」という話題が出たが、応援がゼロの場合、具体的にはどのような形を想定しているのか。コールリードなし、太鼓なしというイメージなのか、という質問である。中心部はどうか？

応援の中心部：

ゼロであればその通りではないか。

司会：

まさにそこが論点である、という話である。

次の意見として、昇格や賞金といった明確な目標がない以上、個人的には応援する目的を見出しつづく、熱量を維持するのは難しいと感じる、応援はサポーター個々人の判断に任せる形でよいのではないか、という意見が出ている。

さらに追加の質問として、通常のリーグ戦と同様の温度感で応援するためには、何が必要だと考えるか、という問い合わせがある。誰に向けた質問かは明確ではないが、「通常のリーグ戦と同様の温度感で応援するために必要なことは何か」という内容である。

みなさんは、何が必要だと思うか？

サポーター：

目標でしょう。

司会：

必要なのは確かに目標である。これは先ほども出た話題であるが、百年構想リーグをクラブとしてどのように位置づけ、何を目標とし、その目標が達成できているのか、できていないのかをどのように判断していくのか、という点が重要である。

これは会社経営と同じである。目標を立て、進捗を確認し、結果が出たのか出なかったのかを検証する。結果が出なかった場合、どこに原因があるのか、という話になる。

以上が、会場から出た1つの答えである。

司会：

それでは、引き続きリモート参加の方からも、質問や意見があれば出していただきたい。

先ほど、応援の中心部の方から出ていた内容について、質問ではないが、かいつまんだ形で回答をいただいた。なかなか言いにくい話題であったと思うが、対応してもらった。

正直なところ、クラブがこの場に来ていれば、このような温度感でキャッチボールができたはずである。

しかし、それが拒否とは言わないまでも、結果として応じてもらえない以上、議論を進めるのは難しい状況である。

壁打ちをする相手もないため、試しに ChatGPT に質問してみた。「ベガルタのサポーターが不安や不満に感じていることは何か」「クラブに対して感じていること、チームに対して感じていること、そしてサポーター同士について感じていることは何か」と問い合わせた。

どこから情報を拾ってきているのかは分からぬが、これまで出てきた意見と重なる部分が多いと感じた。まずクラブの話をする前に、サポーターに関する ChatGPT の整理した意見を紹介する。

まずサポーターへの不安や不満として挙げられていたのは、「サポーター同士の分断」である。応援スタイルや意見、立場の違いによる対立、声の大きい人の意見が全体の意見のように見えてしまう構造が、不安や不満につながっているという指摘である。実際にどこまで当てはまるかは分からぬが、SNS 上でそのような声があるという話も耳にする。

また、同じベガルタを思っているはずなのに、安心して意見を言えない雰囲気があること、応援にはこうあるべきだという空気感が存在すること、初心者やライト層が入りにくい雰囲気があること、応援が自由ではなくなっていると感じることも挙げられていた。

さらに、年月とともに増えていく個人的な負荷、すなわち年齢、家庭、仕事、体力といった要因があり、それでも変わらず高い熱量を求められることへの負担感も示されている。この先も、同じ形で応援を続けていけるのか、という不安である。

以上が、ChatGPT が整理したサポーター側の不安である。

そこで改めて問いたい。仙台において、「応援が自由ではなくなっている」と感じることはあるだろうか。

サポーター：

応援しながら感じていたのだが、何か足りないのではないかという思いがある。ただ、それをうまく言語化できておらず、皆さんに十分に伝えられていない点については申し訳なく思っている。

正直に言えば、もっとできるのではないかと感じている。その原因が何なのかははっきりとは言えないが、全体が一つにならない限りは難しいのではないか、というのが自分の考えである。

司会：

「自由」という点について整理すると、現在はさまざまなルールが増えているという意味ではないだろうか。リーグ全体でもこれまでできていたことができなくなっているというイメージがある。そうした積み重ねが、「自由ではなくなっている」という感覚につながっているのではないかと感じている。

一方で、「初心者やライト層が入りにくい雰囲気があるか」という点については、正直なところ、あまり実感はない。絶対にないとは言い切れないが、強く感じているわけではない。

次に、クラブに対してサポーターが感じていることについて触れる。ChatGPT の整理を見ても、さまざまな情報を拾ってきた結果なのだろうが、共通して挙げられているのは「説明されていない」という感覚である。

例えば、なぜその判断に至ったのか、どのような体制で決められたのかといった点が示されず、「結論だけが提示されている」。考えたプロセスを知りたいという欲求が満たされておらず、不信というより「置いていかれている」という感覚を持っている人が多い、というまとめ。

また、「クラブの軸が見えにくい」という指摘もある。育成と地域密着のバランスが年ごとに揺れているように見えること、補強や人件費に関する発言と実際の結果が一致していないことなどから、「このクラブはどこへ向かおうとしているのかが分からぬ」、という声である。

さらに、「声が届いている実感がない」という不満もある。意見は聞かれているものの、それがどのように扱われ、どう反映されたのかが見えない。対話の場はあっても、その結果が示されないため、応援している当事者でありながら、意思決定の外にいる感覚を持ってしまう、というものである。

これらは、クラブに対する不安や不満につながっているのではないかと、ChatGPT の整理を見て感じた。我々後援会は、毎月定例でクラブと話し合いを行っており、スタジアムなどで聞こえてくる声をクラブに伝えている。

ただし、アンケートに対する回答は毎月公表されているものの、「後援会からこういう意見があり、こう

改善した」という形では示されていない。そのため、結果としてサポーターに伝わっていない部分があるのだと思う。

クラブから「さまざまなチャンネルで意見を聞き、こう改善につなげている」ということを、もっと発信してもらうと良い。後援会がそれを代わって報告するのは難しい側面もあるため、クラブ自身の責任として行ってもらうのが望ましいと考えている。

判断基準が見えない状態が続いていると見ることが、根本的な不満として残り続けているのだろう。今回の質問をにも、そうした点が浮かび上がってきていたと感じている。「説明されていない」「基準が分からぬ」という感覚が、2年半以上経ってもなお繰り返し出てくる背景には、磐田戦での処分に関する判断基準が明確に示されていない、という意見がある。当初から、処分対象者とそれ以外の200人との違いは何なのか、という声は何度も出されてきた。

結論として言えば、まず「ここにクラブが来るかどうか」は一旦置いておいたとしても、応援の中心部とのコミュニケーションはしっかり取ってほしい。クラブとして「どういう応援をしてほしいのか」という考えがあるのであれば、きちんと伝えるのが良いと考える。

そうすれば、中心部の中には反発する人もいれば、納得する人もいるだろう。しかし、そうしたやり取りの場がなければならない。まだ拭えないモヤモヤを解消できるだろう。

そこで改めて確認したい。今日は同じ問い合わせになるが、クラブの処分問題や、それに限らず「どんなクラブを目指しているのかが見えない」という意見・質問が示しているモヤモヤ感について、同じように感じている人はどれくらいいるのか。具体的に言語化できなくても構わない。A「モヤモヤしていると感じている人」は挙手をお願いしたい。

現地参加は36名、リモートは12名である。

B「もうだいたい分かっている」と感じている人も含めて、挙手をお願いしたい。

結果として、現地では1名、リモートでは2名であった。

では、そのモヤモヤ感の正体は何なのか。特に「これだ」と思うものは何なのか。「何にモヤモヤしているのか」をクラブに伝えてあげた方がよい。何か心に引っかかっていることがあれば、ぜひ発言してほしい。

手を挙げて発言してもらえば、それをクラブに伝えることができる。

モヤモヤしているものがあれば、理由がはっきりしていなくても構わない。モヤモヤはモヤモヤとして存在しているのだから。

サポーター：

運営面について発言する。

私が以前投げかけた点でもあるが、ナイター開催時において、照明が安定していないと感じる場面がある。その際に、十分なアナウンスがなされていないのではないかと思うことがある。

クラブが把握しているかどうかは分からぬが、怪我人が出てからでは遅い話である。安全面の観点からも、ここはしっかりと改善していただきたいと考えている。

サポーター：

「検討する」「ご意見として伺う」という表現自体は悪くないが、一般企業的な考え方として、何を、いつまでに、どの程度やるのかが全く示されていない点に、個人的には一番のモヤモヤを感じている。何をいつまでに、どのように改善するのかという具体像が全くない。そのため、正直なところ、ベガルタがどこを目指していて、何をしたいのかが見えていないという印象を持っている。

司会：

クラブからの回答については、質問と回答の 15 番だったと思うが、書面で出してもらっている。今回、「検討します」という回答があったが、いつまで検討するのか、結果どうなったのかが示されていないという点については、私からも質問事項を送る際に指摘した。

12 月 20 日のサポーター会議以降に決まったことがあるのであれば回答してほしい、という形で求めたところ、二項目について回答があった。

ただ、「検討します」という言葉だけでは、単なるリップサービスと受け取られてしまう恐れがある。考えないのであれば、「回答しません」「できません」と、その理由を明確に示した方がよい。「今後の参考にする」「検討する」といった表現は、いわゆる官僚的な言い回しで、結果的にやらない場合に使われがちな言葉になってしまう。

そうした話をした結果、具体的に決まった点が二つ盛り込まれた。これは大きな前進とは言えないかもしれないが、一步前進と受け止めていただきたい。今後も引き続き話をしていきたいと考えている。ありがとうございました。

サポーター：

簡単にまとめる。昨年のサポーター会議でも同様の話をしたが、要するに、サポーター、会社、クラブを含めて、全体が一つの方向を向いていない。つまり、一体感が全くないということである。

原則というか、主導するのはクラブだと考えているが、一体感があつて初めて、J1 昇格などの共通の目標を達成できる。私はこれまで 30 年近く見ていてそう感じている。

しかし、現状のクラブ体制は、こうした一体感を生み出す方向に全く向かっていない。昨年も改善してほしいと伝えたが、何も進歩が見られない。

クラブとサポーターが一緒になって何かを成し遂げる、こうした状態が全くできていない。

これが、今多くの人がモヤモヤしている一つの大きな原因だと、私ははっきり思っている。

これが改善されて初めて、同じ方向を向き、同じ目標に向かって、皆が全力で頑張れるのではないかと考えている。

そのため、この点を訴え続けたい。

話し合いすら十分にできないクラブと、どうやって前に進んでいくのか。結局はそこに尽きると思っている。

司会：

ありがとうございました。

これまで出ている意見を聞くと、かなり多くの声を取りまとめた内容だと感じている。

リモート参加の方から挙手があったので、発言をお願いしたい。

サポーター（リモート）：

クラブとの話し合いで後援会や応援の中心部の方々が、具体的に確認する予定の事項はあるのだろうか。どのような点について話し合う予定なのか、ぜひ教えていただきたいが、いかがだろうか。

司会：

毎月行っている定例会は試合運営や、直近で発生している懸案事項について話をする場である。そのため、今回の件のために、特別に新しい枠を設けるという前提ではない。

その上で、直近でサポーターカンファレンスを開催したという経緯があるため、サポカンの中でどのような意見が出たのか、という点については触れることになると思う。

具体的には、冒頭から出ていた「応援のテンションを作るのが非常に難しい」という声や、「スタジアムに足を運ぶこと自体に戸惑っている人がいる」という話である。

また、クラブに対して「モヤモヤしているものがある」という声が多く、それは説明責任を十分に果たしていないのではないか、という指摘についても、今回いただいた意見を整理した上で伝えていきたいと考えている。

それを受けたクラブがどのような判断をするかは、最終的には経営判断であり、我々が是非を決めるものではない。まずは事実として伝えるところから始めたいという考えである。

その中で、これは皆さんにフィードバックした方がよい、という内容が出てきた場合には、こうした場を通じて共有する形になるだろう。

サポーター：

私がモヤモヤしている点は、クラブの「応援」に対するスタンスである。

より具体的には、J1昇格を目指す上での、クラブの応援に対する考え方についてである。

J1昇格を目指すのであれば、試合の雰囲気を作るという観点でも、入場者数を増やす、入場料収入を増やすという観点でも、サポーターが盛り上がるることは、非常に重要であり、望ましいことであると考えている。

実際、クラブ自身も入場料収入が重要であるという発信をしている。

しかし、今回のサポカンで応援の中心部の話を聞いていると、そうした表向きの話はある一方で、センシティブな問題については、結局向き合ってもらえない、という声が出ていた。これは別の場面でも、よく耳にする話である。

J1昇格を目指す上では、サポーターといかにうまく関係を築き、まとめていくかが極めて重要であるにもかかわらず、最もコアな部分では向き合おうとしないように見える。その点に、強いモヤモヤを感じている。

そのため、来週予定されているクラブとのミーティングにおいても、この点については、ぜひしっかりと確認したいと考えている。

司会：

ありがとうございました。いただいた内容は、しっかりと伝えていきたいと考えている。

次に、質問の中に「売上目標はいくらを想定しているのか」という、問い合わせがあった。この点については、29日に開催された取締役会において、決算見込みおよび来年度予算、正確には半期分、5か月分の予算について説明がなされている。また、百年構想リーグ分の予算についても発表があり、すでに報道発表も行われている。

現状、クラブの総売上高はおよそ24億円である。グッズ売上については委託販売のため別枠となる。。それを除いた24億円規模の売上のうち、百年構想リーグについては、その半分程度、約12億円を売上予算として見込んで臨む予定である、という内容が今回の回答に盛り込まれている。

また、経営計画やビジョンに関する指摘もあった。2021年に策定したものについて、「形骸化しているのではないか」という趣旨の意見である。クラブへの質問10番に該当するが、たしかに「経営ビジョン2021」という動画を公開しており、ホームページにも掲載されている。そこでは、5年後、すなわち2026年に売上30億円、正確には35億円を目標として成長を目指すと示されている。

しかし現状は、25億円前後を行き来している状況であり、山形や岡山など他クラブと比較しても、売上が伸びていない、という意見だった。この点についても、サポーターの中にモヤモヤが生じているのも理解できる。

少し見づらいが、前回のサポーターカンファレンス(12月20日)で示したグラフを見ると、ベガルタ仙台の過去3年間、2024年までの売上推移は、やや減少傾向にある。他のJ2クラブを中心としたデータでは、一部下降しているクラブもあるものの、全体としては右肩上がりの傾向が見て取れる。

この点については、きちんと伝えなければならない重要な事実だと考えている。売上を伸ばさなければ、強化費を確保することはできない。これは現実である。Jリーグの公式資料でも、売上高とリーグ順位には強い相関関係があることが明示されており、資金力のあるクラブほど順位が高い傾向があることは明らかである。

売上高、いわゆるトップラインが右肩下がりになることは、望ましい状況ではない。一般的に、売上が減少する理由は2つしかないと言われている。1つは市場自体が衰退している場合である。もう1つは、市場全体は成長しているにもかかわらず、自社だけが伸びていない場合であり、その場合は経営努力が問われる。

我々は応援する立場はあるが、それだけで強いチームができるわけではない。クラブ自体が成長し、売上を伸ばしていくことが不可欠である。その思いは今回の質問にも表れており、これまでも継続的に出てきている。ただ、その状況が見えないからこそ、モヤモヤが生じるのである。

こうした点については、少しずつでも話ををしていきたい。右肩上がりの姿を見たいというのが率直な思いである。「こういう不安や疑問を持っている」ということが共有され、「心配するな」と言うのであれば、その言葉をしっかりと示してもらえば、サポーターも迷いなく、100%の強度で応援できるのではないかと考えている。その意味で、今回この点を確認した。

すでに2時間が経過しているが、全体を通して、どうしても言いたいこと、あるいはクラブに聞いてほしいことがあれば、この場で意見として出してほしい。この会議に限らず、伝えたい、聞いてほしいという内容があれば発言してもらいたい。

サポーター：

10番の質問を出したのは私である。まず、数字について誤りがあり、申し訳ない。目標は35億円であるが、それが達成できていないという点が問題である。

経営ビジョンの件に加え、スタジアムパーク構想など、これまでさまざまな構想が示されてきたが、「検討します」で終わり、その後のフィードバックがまったくないことが、個人的に最もモヤモヤしている点である。

質問10番の一番下にも記載したが、就任時から営業などを中心的に担っている専務が、これらについてどのように考えているのかを、クラブミーティングでぜひ聞きたい。そのための根回しをお願いしたい、という趣旨である。

司会：

クラブミーティングへの出席予定はあるか？もし出席するのであれば、そこで直接確認してもらえばよいと思う。なお、この件については、同様の質問としてクラブ側にはすでに投げている。また、「サポート側からこうした質問があった」という事実は、クラブにはきちんと伝えてある。

応援の中心部：

オンライン参加者も含めて、少し確認したい。現場にいる皆さんにも聞きたい。

「バス待ち応援依頼」という言葉を聞いたとき、どのような意味を想像するだろうか。おそらく、今の司会が想定している意味とは、若干ずれがあると思うが、確認のために行う。

「バス待ち応援依頼」と聞いて、

1つ目として、クラブがサポート側に向けて「バス待ち応援をしてください。お願いします」と依頼する場面を想像するか。

それとも2つ目として、サポート側が「バス待ち応援をしたいので、やらせてください」とクラブに依頼する場面を想像するか。

まず1つ目、クラブがサポート側に対して「バス待ち応援をしてください」と依頼する意味だと感じた人は、手を挙げてほしい。

はい、多いですね。リモートの方も手が挙がっている。これで十分である。

次に、サポート側からクラブに対して「バス待ち応援をさせてください」と依頼する意味だと捉えた人は、手を挙げてほしい。

司会：

挙手の数を見ると、おおよそ43対2である。

応援の中心部：

なぜこの話をしたかというと、最近、クラブからの対応に強い違和感を覚える事例が続いているからである。昨年の帶の件もそうであり、シーズン終盤の大変な試合前に「バス待ちをやろう」という話をしたところ、「バス待ち応援依頼を書面で出せ」と言われた。要するに、書類を書かなければやらせない、という対応であった。

正直なところ、納得できなかった。バス待ち応援は、サポーターがやりたいからやるものである。そもそも「バス待ち応援依頼」とは何なのか、という話になる。これまで、バス待ちはサポーターの意思によりやりたいときにやってきた。なぜ今さら、「この大事な試合でバス待ち応援をしたいのですが、このような応援内容となります。いかがでしょうか」といった書類を出さなければならないのか、理解できなかつた。結果として、その試合では実施しなかつた。

帯の件も同様である。最終的には実施したが、あれも無理を重ねて行ったものである。その際も、書類を書けと言われ、雛形が送られてきた。これまで帯に関して、特別なルールなど存在しなかつた。今まで問題なく実施できていたことである。

なぜ今この話をしているかというと、シーズン中の大事な試合の前にこのようなフロントの対応がを表に出してしまうと、「ふざけるな」という感情が生まれてしまうからである。誰でもテンションは下がるし、やる気も削がれる。しかし、事実としてこうした出来事があったことは、どこかで伝えておいた方がよいと考え、このシーズンオフのタイミングであえて発言している。

帯の件についても、本来であれば帯の計画が始動した段階ではルール上特段問題のない内容であった。それにもかかわらず、「実施する」と分かった途端、さまざまな理由を挙げて制限しようとする動きが出てきた。ここはダメ、そこはダメと、次々に条件が追加された。

しかし実際には、従来から続いているルールの範囲内で、問題なく実施可能な内容であった。それにもかかわらず、その試合だけ特例のようなルールが設定され、まるで帯対策のような扱いになっていた。

一方で、クラブの年末や年始の挨拶、公式な発信の中では、サポーターの活動が都合よく取り上げられ、「素晴らしい」「クラブとして実施した」といった見せ方がされる。しかし、実際の内部対応はまったく異なる。このギャップについて、「どういうつもりなのか」という点を、クラブにはしっかり問い合わせほしい。

サポーターが担った“おいしい部分”だけを切り取って利用し、実際のやり取りや苦労には目を向かない。その感覚が本当に正しいのかどうか、改めて見直してもらいたい、というのが率直な意見である。

司会：

きちんとコミュニケーションが取れていれば、今のような話は笑い話で済む内容である。お互いに意思疎通ができていれば、「何を言っているのか」「ああ、そういうことか」で終わる話だと思う。

しかし、根本的にコミュニケーションがない状態で「この書類を出せ」と言われれば、「何なんだそれは」という話になる。結果として、クラブ側も内部で余計なエネルギーを使い、サポーター側にもストレスをかけてしまっているのかもしれない。

その積み重ねが、先ほど話に出ていた「一体感がない」という状況につながり、最終的には昇格できない、昇格できないから売上高も伸びない、売上が伸びないからチームも強くならない、という負のフィードバックループに陥っていくとしたら不幸だ。

だからこそ、コミュニケーションをしっかり取るべきである。そこが変われば、状況は驚くほど変わると考えている。

サポーター：

2月8日のクラブミーティングについてである。参加できない人にもアンケートの案内が来ていると思

う。

私の懸念としては、アンケート結果を見て、「特に異論はありませんでした」「特に問題提起はありませんでした」という形で話が進んしまうことが嫌だという点である。

2月8日はアウェイ戦の翌日ということもあり、都合が合わない人もいるかもしれない。しかし、アンケートという形で意見を出せる機会がある以上、モヤモヤしていることは書いた方がいいと思う。「こんなつまらないことに答える気はしない」とポイントを捨ててしまうのは、もったいないと感じる。

私自身は、サポーターの活動の“良い部分”だけを切り取って使い、実際の運用や感覚が噛み合っていない点について、アンケートに書くつもりである。プライドがあるなら、年賀状のような使い方はやめてほしい、という趣旨である。

前回、司会が話していた「サポーターをもっと信頼してほしい」という点についても記載した。今日、いろいろと思うところがあった人は、ぜひアンケートに反映してほしい。仕組み上、複数回答できるのかは分からぬが、とにかく参加した方がよいと思う。

司会：

市民後援会は一貫して、コミュニケーションをしっかり取るべきだという立場である。

意見が違うからこそ話し合いをするのであって、意見が違うから話し合わないところに、対立や争いが生まれる。

後援会も、考えの違いがあっても毎月の定例会を続けている。それは、話をしなければ伝わらないし、理解してもらえないからである。すべてが分かり合えるわけではないが、少しでも分かってもらえば、応援する側も気持ちよく応援できる部分が増えると信じている。その思いで続けているので、理解してほしい。

先ほどアンケートの話が出たが、今回は主に4点あるようである。

1つ目はファミリー指定席についての感想。

2つ目は百年構想シーズンの意味についての意見・要望。

3つ目は2026／27シーズンについての質問・意見・要望。

4つ目は自由記述である。

「こう感じている」「モヤモヤしている」という事実があるなら、それを伝えることが重要である。皆さんから直接声を届けてもらうことが、クラブをより良い方向に動かす力になると考えている。

リモート参加の方で、ほかに発言はあるだろうか。

特にならうので、本日のサポカンはこれで終了とする。

百年構想リーグでの応援がどのような形になるかは、数字（入場者数）を見ないと分からない部分もある。一方で、懸念すべき点がいくつか出された。中心部も迷いながら考え、進んでいるとのことである。

チームのためになることを一つひとつ確実にやっていきたいと考えているとのこと。

今日は長時間お疲れ様でした。ありがとうございました。

リモート参加の皆さんも、ありがとうございました。

以上